

# 禅の友

Zen no Tomo

# 9

September 2024





ご本山だより  
大本山永平寺【川作務】

かわざむ

大本山永平寺  
福井県吉田郡  
〇七七六・六三・三一〇二



永平寺の境内の正面を横切るように永平寺川という川が流れています。年に三回、修行僧たちがこの川に入り、枯れ枝や落ち葉を拾います。これを川作務といいます。坐禅や看経かんぎょう以外の掃除や諸々の作業につとめることを作務と言います。

一般的に掃除などの作業には目的があります。汚いところを綺麗にしたり、必要な数だけ物を準備したり、何か目的を果たすためにその作業を行うのです。しかし、作務にはそれらの目的がありません。ただひたすらに目の前の行為を行うだけなのです。もし目的があるとすれば、仏さまと同じように、定められたとおりに行うということがそれです。永平寺の修行とは朝起きてから夜寝るまで、仏さまと同じように、定められたことを怠らざり行くことなのです。

川に入り流れに沿って枯れ枝を拾い、

落ち葉を集めるのですから体を沢山動かします。また、水に濡れながらの作業は体力を消耗します。その為、この日は特別に朝午時あさごひになります。朝午時とは、都合により普段は昼に行う仏さまのご供養を朝に行うことです。お供え物も普段は朝にお粥をお供えしていますが、この日はお昼にお供えする香飯かはん（ご飯）に変わります。修行僧たちの食事も同様に朝食が変わります。お粥と漬物、ごま塩という内容が、ご飯に汁物、漬物と変わります。しっかりと食事することで活力が生まれ厳しい作務を行っていただけるのです。

朝からお腹いっぱい食べ、普段は出ることができない屋外でたつぷり身体を動かし、汗をかけばとても心地よい気持ちになることでしょうか。川作務は厳格な修行ではありますが、この日をひそかに心待ちにしている修行僧もいるかもしれません。



# ご本山だより 大本山總持寺【彼岸と此岸】

大本山總持寺  
神奈川県横浜市  
☎〇四五・五八一・六〇二一



あかあかと 日はつれなくも 秋の風  
九月になつても太陽の日差しが強く、  
容赦なく暑さが肌に感じられる中で、  
ふと吹いてきた風が秋の雰囲気を漂わ  
せている様子を詠んだ松尾芭蕉の句で  
す。

樹木に囲まれている總持寺でも木々  
の間を通ってくるその風が感じられる  
ようになりました。

九月は様々な歳時があります。重陽  
の節句、敬老の日、秋彼岸、十五夜。  
また二十九日は兩祖忌と言ひ、道元  
禪師と瑩山禪師の命日であり、特に曹  
洞宗ではこのお二人のお祖師さまの限  
りない遺徳を偲び報恩感謝する大切な  
行持なのです。

更に十九日から始まる一週間が秋彼  
岸です。この中日（秋分の日）は太陽  
が真東から昇って真西に沈み、昼と夜  
の長さがほぼ同じになる日です。

仏教では煩惱や迷いのない世界を彼  
岸と言ひまた逆に私たちが生きている  
この煩惱や迷いが満ち溢れている世界  
を此岸と言ひます。

ご先祖さまを供養すると共に自分自  
身に反省を加え、六波羅蜜とされる六  
つの善き行いの種蒔きをする修養期間  
なのです。

「今日彼岸 菩提の種を蒔く日かな」  
の句があるように善き行いの種蒔きを  
し、芽が出て茎が伸び、花が咲くよう  
に、ひとりひとりがせてこの一週間  
に六つの行いの種を蒔くことを実践す  
るのです。その六つとは、布施（施  
し）、持戒（規律を守る）、忍辱（寛  
容）、精進（努力）、禪定（心を静める）、  
智慧（正しい判断力）です。これらを  
実践し、悩みの多い現実の世界（此岸）  
から煩惱から解放された世界（彼岸）  
へ向かうために精進したいものです。

選・坊城俊樹

漣は海の寝息か明易し

島根県 石原 清司

評 これはいわゆる擬人法であるが、あまりにも漣の様子がリアルで本当に寝息を立てているように感じた。夏の朝は早くに明ける。その頃は海もまだまどろんでいる。大きな生命体である海を畏怖し、柔らかな感性によって出来た詩。

遺されし真つ赤な外車梅雨に入る

岐阜県 大下 雅子

評 梅雨の季節になったが、そこに遺された一台の外車がある。雨に濡れているのか、その車も主を失って泣いているようだ。一読してこの車はオープンカーかと思った。それだからこそその車は若いころからたくさんの想い出を乗せて走ってきたのかも。

◆ 日焼顔齒が抜けたよと見せたたくて

東京都 松本キヌエ

◆ 万緑や鳥語おりなす砲台跡

和歌山県 田崎よし子

◆ 藤棚の房の長きをくぐりけり

岡山県 有元克英

◆ 早朝の静けさ纏ふ茄子の花

埼玉県 新藤共子

◆ 笹百合の錆びて匂ひのなほ激し

長野県 森山昌子

◆ 春星や灯りの漏るる夜行バス

埼玉県 伊藤 博

◆ おほらかにすじを通して螢の夜

山口県 藤野祥子

◆ みぬことに慣れて独りの冷奴

群馬県 高橋良子

◆ すかんぼを折る音のして雲もなし

鳥取県 徳本義則

◆ 去年今年喜怒哀楽を知る鏡

三重県 西村廣視

選者吟

夏蝶か亡き者の操る紙か

俊樹

作句小見

春の蝶はひらひらと可憐だが夏の蝶というものは原色で大きく羽搏いている。それはあたかも亡くなった人が原色の折り紙を操っているのかと思われた。そしていつも思うのは夏の花に群がる黒揚羽。あの蝶はきつと誰かの魂を乗せて飛んでいる。

選・長澤 ちづ

青む田をかすめ飛び交う夏つばめ明日は  
雨らし雲低くあり

鳥取県 眞山 博充

評 「青む田」とは田んぼに稲がすくすくと育っている様子で、その上を燕が掠めるように低く素早く飛び交うのどかな情景が詠われている。季節が穏やかに推移しなくなっている昨今、心の潤う一首。

切り貼りをしたる障子に皺増やしさみだ  
れ冷えて降りつのりたり

岩手県 阿部 照子

評 障子の破れた部分を繕って花形などで切り張りをする生活、昔は何処の家でもそうだったように思う。湿度の高さで変化する紙の微妙を捉えて濃やかな詠いぶりである。

◆ 原子炉を抜け来し水ががうがうと音立てながら海に帰れり  
福島県 大槻 弘

◆ 一匹のトンボ脱皮し陽に映えてやわやわと芦の葉の上におる  
鳥取県 徳本 義則

◆ 磯蟹の干溜らびたるがつぶれをり港に近き道のかたへに  
広島県 徳永 進一郎

◆ ヘビイチゴ白詰草しろつめくさの傍らで夏が始まる光を放つ  
秋田県 小松 紀子

◆ 出征者が旨いと食べた祖父おおぢの元うどん屋の椀にて日々食ぶ  
三重県 西村 廣視

◆ 危機感を煽りたてつつ夜の底を緊急車両のサイレンが行く  
埼玉県 白藤 巳玲

◆ 台所に灯り点せば名の知れぬ野鳥ときを朝の挨拶  
島根県 横山 豪吾

◆ 夫の逝きし六月の季巡り来ぬ供花の紫陽花好きかは知らず  
静岡県 杉原 民子

◆ ただいまと猫に声かけ部屋に入る迎える者のいる温かさ  
山口県 濱田 道子

◆ そらのうえ浮遊惑星あるとききロールモデルだ月曜の朝  
静岡県 内山 忍

選者詠

三人を征かせ二人が還らざる母たる嘆き祖母は語らず

ちづ

作歌小見

夏が来ると思われるのは出征して還らなかつた若い人たちのことです。日本では八十年も前のことですが、戦争は一度始まると如何に終結が困難かを現在の世界情勢が教えています。一日も早く世界から戦争がなくなりますように。